（夕刊）　昭和54年1月22日　（月曜日）

東京新聞

それぞれの松浦

岡部　耕大

涙で見送る祖母の視線

なぜ振り返ってやることをしなかったのだろう。もどかしく、なにかでいっぱいにふくらんでいたぼくには、涙を浮かべてぼくを見送る祖母の視線はちょっぴりてれくさかったし、疎（うと）ましかった。「したらっ」それだけいって踵（きびす）を返してどんどんバス停へ向かって歩くぼくに、母は「耕ちゃん、おばあちゃんの見よらすばい、手ば振らんね」とぼくの歩きぶりの速さに息を弾ませながらも涙声でいった。

「よかっ」。餞別にと祖母が隠すようにしてくれた輪ゴムで束ねた百円札を学生服のポケットにねじ込むと、なにもかもが蒼（あお）い三月の透き徹った風景の中で、風になされるままに体あずけて、そのぐるりだけが真冬のように茶黒くちっちゃく佇（たたず）む祖母のあきらめの視線を無視して、想いははるか東京を睨（にら）んでぼくは火照っていたものである。

口の悪さに周囲は辟易

早くに連れ合いを亡くし「亀の甲より年の功」を口癖にして、漁村の小さな木賃宿の女主人公として君臨した祖母はその気丈夫もさることながら、口の悪さで周囲を辟易（へきえき）させていた。その御歯黒の口から機関銃のように飛びだす言葉は死語もへったくれもあればこそ。「あんおばばの言葉はおりにもわからん」古老が嘆いていたのがなつかしい。

この祖母がなぜかぼくを溺愛した。添い寝の時などには、そのわからん言葉で言葉噛み砕き噛み砕き、いいかいいか、いろんないろいろを語ってくれたものである。

「魂、水を飲む」「河童のザワタロウ」「海坊主」「狐と産婆」「元寇」「心中もの」。心中ものを語るときの祖母は、まるで自分がその主人公でもあるかのように言葉は涙で潤んでいたし、その時の気分でストーリィは大幅に変更された。

夏の夜などに襦袢（じゅばん）一枚で闇に身振り手振りよろしく語るときの祖母などは白い肌から白粉（おしろい）と血のにおいがぷんとして、子供心にもなまめかしかった。ぼくの体から饐（す）えた男のにおいがするようになると、祖母は敏感にぼくの中から暴力と不良のにおいを嗅ぎとったようである。朝から「湯にひゃあれ」とせっ付くのにはまいった。

喧嘩三昧に明け暮れて

その頃の松浦は復興産業石炭に活気づいていた。どことなく曰（いわ）くありげに悪の魅力を漂わせて転校してくるヤマの坑夫の息子たち。大人びたその連中に負けまいと喧嘩三昧（けんかざんまい）に明け暮れた。

〝ソボ　キトク　ウナ　カエレ〟。帰れる状態ではなかった。新宿の映画館でその電報を握り締めてぼくは白っちゃけた画面を観ていた。画面のむこうには風になされるままに体あずけた茶黒い祖母の塊のあの日の姿があった。そして、そのバックの風景には朽ちた炭住の大納屋があり、骨身晒（さら）した廃坑にころころころと風が吹いていて、日輪だけがかっと照っていた。海のむこうにはぽっかりと島が浮いていた。

昭和三十九年、東京オリンピック。ぼくが東京へきたときの松浦の風景が幾重にもダブってそこにあった。そこにいることのできる人は、まだいいのだ。

友人たちへ想い馳せて

ぼくがゴーストタウンと命名した廃坑の、がらがらと崩れる音だけを残して闇の闇から闇へ消えていき、それぞれの松浦をうちに抱いて流れているであろう名前も忘れた友人たちへ想いを馳せた。

それらは祖母から添い寝語りに聴いた物語ともダブって、その言葉もろとも、ぼくの、ぼくだけの九州肥前松浦へとエスカレートした。

電報握り締めて白っちゃけた画面を観ている頃、やはり祖母は死んでいた。弟をぼくとまちがえて「耕大よう帰あってくれた」といったそうである。なぜ振り返ってやることをしなかったのだろう。

ぼくの肥前松浦はイメージもことばもすこぶる荒唐無稽ではあろうが、血と歴史だけはしっかりと裏打ちしてるつもりである。

〝松浦市は日本列島の西端、列島の陸地が支那海に没する処、長崎県の北松浦半島の北部にある。松浦駅を起点として東京一二八四キロ、大阪七三三キロ、北方釜山に二七〇キロ、大連一〇七二キロ、また上海八五五キロ〟（松浦市史）。

（劇作家、第二十三回岸田戯曲賞受賞）